



# フィンランド、スイスを視察して

全国市長会欧州都市行政調査団 団長 真庭市長 (岡山県)

太田 昇

## はじめに

2018年10月21日から28日まで、全国市長会欧州都市行政調査団としてフィンランド、スイスを視察する機会を得た。以下、そのことを報告する。

## 日本の在り方を考える機会になったこと

自治体の長も、国内外の政治、社会、国の在り方を考えながら行政をしなければならぬが、今回短期間ながら海外視察して改めてそのことを深く認識した。

「百聞は一見に如かず」である。

これまでフィンランドについての基礎知識は乏しく、ロシアと国境を接していて、シベリウス作曲のフィンランディアがロシ

アから生まれ、演奏することができなかった時代があるとか、人口が少ないながらもキアがあり、教育水準や国民幸福度が高い、高福祉高負担の国、サンタクロースとムーミンの祖国と言う程度だったが、出国前に、Pekka Orpana 駐日大使と懇談することができ、幸運にも多くの予備知識を得ることができた。

フィンランドは、人口は北海道と同程度(550万人)で、面積は日本より少し小さいが亜寒帯地域が多く、自然条件がかなり厳しい。また、フィン族の土地でありながら過去はスウェーデン、ロシア帝国からの支配に苦しみ、1917年のロシア革命に乗じてやっと独立し、それも当初は内乱に苦しんだ「若い国」。それから、100年間を経て、「世界で最も貧しい国の一つから、

最高の技術的専門知識を持つ世界有数の裕福な国」へと変ぼうし、2018年の国連の幸福度調査で1位になった。ちなみに日本は前年より3位下げ54位である。消費税率は24%であるが。訪問した福祉施設、教育施設の雰囲気がかく「明るい」というのが強烈な印象である。

スイスでは、16世紀以来の中立国という立場を上手に活用してI O C (国際オリピック委員会)や多数の国際機関を持っていることが、豊かな国づくりになる大きな要因の一つになっているのではと感じた。

両国とその自治体は、気候や風土の上で元来豊かな地域とは言えない中で、いやそれ故に、その置かれた条件を上手に生かしながら、知恵を使い、豊かな国づくりを行っているのである。



ヘルシンキ市副市長（中央）と団員（キナポリ広域サービスセンターにて）

日本は、有史以来の少子高齢化が進み、その面で「世界の先端」を走っているが、天変地異さえなければ自然風土に恵まれた国であり、この課題を乗り切れないはずがないと思う。国と地方自治体が緊張感を持ちながら協力・連携して、この困難を乗り越え、永続的な発展を目指していきたいものである。

## フィンランドにて

### （1）10月21日15時過ぎにフィンランド着

成田空港を出発して約9時間でヘルシン

キ空港に到着した。ヨーロッパの玄関として日本から一番近い空港である。驚いたことは、同乗していたフィンランド航空のほとんどの人がトランジットしたことである。場所の優位性を生かして、ヨーロッパのハブ空港になりつつある。ヘルシンキの都心部にはロシア風の建築物が多く（ロシアに行ったことはないが）、かつての歴史の影響を強く感じた。

### （2）10月22日10時30分〜12時過ぎ ヘルシンキ市内高齢者施設「キナポリ広域サービスセンター」

■ヘルシンキ市副市長サンナ・ベシカンサさんから

ヘルシンキ市の概要（人口65・3万人、出生率が2を超えていたが、近年2以下になり、高齢化も始まっているなど）と福祉の歴史、特に「ネウボラ（保健センター）」の説明を受けた。ロシアからの独立後、内乱状態を乗り越えて、まとまることの重要性を学び、特に近代民主主義社会で最も早く、1906年に男性・女性ともに参政権を得て、男女平等が比較的早く進む中で、社会建設をしたことが、今日の進んだ福祉社会形成につながったことがよく理解できた。なお、フィンランドでも高齢化と地方の人口減少が進み、その対応に迫られており、現在、国会で社会福祉と医療分野を担う広域自治体をつくるという大胆な改革案が審議されているとのことであった。

■上記施設の館長サリ・ヘドマンさんから  
施設の概要の説明を受けた。「違いを尊重する」「平等」「標準」の重要性を強調していたこと、また、高齢者に編み物や手を使う仕事をさせていることが印象的だった。

■館内視察  
高齢者の総合施設で、宿泊からデイケアまで幅広く総合的に行っており、図書サービズ、演劇サークル、社交ダンス、スポーツジム、陶芸、木工などさまざまなことを楽しめる施設であった。印象的だったのは、建物も雰囲気も明るく、特に、1階にレストランがあり、外部の市民にも開放されていることであった。地域と一体的な福祉施



ヘルシンキ市副市長からヒアリング



在フィンランド日本国大使館入口にて

設が望ましいと痛感した。

**(3) 10月22日14時過ぎ〜16時半 山本条太**

**駐フィンランド特命全権大使**

少し遅い昼食後、日本大使館で山本大使からフィンランド事情のレクチャーを受けた。約2時間半に渡り、フィンランド情勢はもとより、ヨーロッパの動向に至るまで懇切丁寧にレクチャーしていただいた。やはり、現地でお聞きする話には臨場感と説得力があった。国内が比較的安定しているとはいえ、ヨーロッパでの反移民主義の動きは、フィンランドで

も高まり、政治の面で不安定要素が出てきている。しかし、歴史の教訓から「標準」とか、「全体」とかの観点が強く、国内の政治や社会が大きく乱れることは考えられないという見解であった。

**(4) 10月23日8時過ぎ〜15時過ぎ ヴィヒ**

**チイ市のクオッパヌメン一貫教育センター**

このセンターは、こども園、小学校、中学校一貫の教育施設で、750人の子どもが在籍している施設であった。新しく、きれいで、開放的な印象を受けた。

**■市長 サミ・ミッティネンさんから**

若い情熱的な市長であった。ヴィヒチイ市は、人口3万人でヘルシンキ市の衛星都市として急成長している若いファミリー層が多い都市で、社会福祉、医療、病院経営は隣接する市と共同で行っているとのこと。

サミ市長は若手(41歳)のエリートで、MBAを取得し、EU(欧州連合)の勤務、国会議員秘書などを経て、31歳で別の市長に就任した後、現在の市長を務めているとのこと。給与は、月額9400ユーロ(1ユーロ112.8円で計算すると120万円)とのことであった。

**■保健師 セイヤ・ムンテルさんから**

有名な「ネウボラ」という福祉制度の説明があったが、適切な福祉の充実施策が社会発展の基礎となることを実感した。子ども(7歳)が小学校に入ると、健康については、保健師がその役割を担うことになること、



ヴィヒチイ市長と筆者

教員のほか、保健師、生活指導員、カウンセラー、学校医がおり、保健師と生活指導員は専門職として常勤で、教員と連携を取り、専門職として子育てに貢献しているとの話を伺った。

**■国語教師(兼市議)ピリヨ・レバニエミさんから**

最近では青少年もグローバル化についていけず、また、貧困家庭も出てきているとのこと。特に、青少年のケアは大切で、親の非行が子どもにも影響を与える研究結果も出ている。スポーツクラブなどで、頭と体を使い、非行などを未然に防止する改革が必要であると強調していた。国の教科書検



国語教師（兼市議）ピリヨ・レバニエミさんと意見交換

定のような制度はなく、教科書、教材に自由度が高いとのこと。

日本の教育に造詣が深く、日本の小学校の1クラスの定数が40名というのは多過ぎること。また、日本の学校は、教員、学校関係者のコミュニケーション力が弱く、教員の裁量権が少な過ぎるし、競争心が強過ぎる、もっと子どもの強みを伸ばす教育をする必要があると力説していた。

なお、市議活動との両立を尋ねたところ、議員は名誉職で、市議会は夜間に開催するので、教師の仕事に支障はないとのこと。議員活動の在り方も参考になった。

■生活指導員 サトウ・ランピネンさんから



学校給食を体験

学校現場で子どもたちにも友人関係や家族関係のこと、うつ病など、いろんなことが起きるが、早期の介入をすることが必要。

家族の所にも行くし、社会福祉士、児童福祉士なども連携を取り、問題解決は、できるだけ子どもの自主性を、自らが解決する方向に導き、また、自分の得意な分野を伸ばすことが重要とのこと。

■学校給食を子どもたちと共に

学校給食は無償であり、食事はジュツフェ形式で行われていた。15歳の中学生たちと一緒に食事を取った。英語で日常会話ができ、多くの生徒は周辺国に行ったことがあり、国際的視野を持っていた。医師、

科学者などと自分の進路もそれなりに考えている様子がうかがえた。

■校内視察から

衝撃的だったのは、教員室に教師個人の机が並ぶ光景がなかったこと。机がないわけではないが、個人の専用はないとのことであった。中央部分にカフェのような場所があり、落ち着いて教師同士の対話ができる雰囲気だった。また、金属加工、木材加工、絵画や彫刻などができる部屋が充実していた。日本でも、「楽しく創造力をつける部屋」を作れないものか。AI（人工知能）時代には、自分の頭で考え、強い意志で課題を追及できるヒトを育成する事が重要な課題である。

(5) 10月24日 ユネスコ世界遺産「スオメンリンナ要塞」視察後、スイス国ローザンヌ市まで移動。宿泊

## スイスにて

(1) 10月25日 8時40分〜11時30分 ローザン

ヌ社会医療施設 EMS Les Pins

■館長フランソワ・マットさんから

施設は、閑静な住宅地にある目立たない建物であるが、きれいで玄関の様子は一見ホテルに見えた。20名の精神疾患の入居者（記憶障害、うつ病、人格障害、薬物・アルコールによる中毒）がいるが、平均85歳以上で、平均在館年数は2年であり、家族との契約で延命治療をしないこととしていると



フランソワ・マツ館長からヒアリング（EMS（社会医療施設）にて）

のこと。

このような施設に入るには、医師の診断書が必要で、費用は州政府が決定する。運営費1日300フランで、保険会社80フラン（保険金）、州政府50フラン、入居者170フラン。10年前にさかのぼって資産、所得を調査して資産家が負担するが、無収入の人の分は州政府が負担する。常に満室状態で、入所待ちのリストを持っている。職員の人件費は州政府の負担である。雇用する際に特別の資格を有しないが、長期に勤務して資格を取る。なお、短期勤務のパートの職員も多い。失業率が高く、福祉人材の確保は困難とは言えないが、スイ

ス人はこのようなサービス業に就くことを好まないで、外国人スタッフが多数。ロビーもホテルと間違えるような施設で、全館がきれいに整備されている。印象的だったのは、美容室と歯科治療室。特に、女性は何歳になってもおしゃれをするべきとの考えが施設側にも強く、ペディキュアなども塗るサービスをしているとのことである。また、「ホテル」業務という考え方が強いと感じた。なお、重労働対応として、かなり機械化されていた。

**（2）10月25日14時～16時30分 ローザンヌ**

**市役所**

市役所の建物は、1525年の建築で、どっしりした歴史的な風格のある感じ。ローザンヌ市街地全体も美しい。また、電線が地上にないことも街が美しく見える要素であろう。

■ローザンヌ市国際交流部長クリスチャン・ズッターさんから

市長は、会議が入ったため、どうしてもこの場に参加できないとのこと、部長から市の概要と行政組織について説明があった。14・5万人、周辺を合わせると24万人の都市で、IOCをはじめ国際機関が多数あり、160カ国から集まった外国人たちが全市人口の4割を占める国際都市である。驚いたことに、市の財政全体規模が2119億円（円換算）であること。地下鉄を経営していること。このような財政運用ができる秘訣は、I



ローザンヌ市国際交流部長からヒアリング

OCをはじめスポーツの本部など国際機関があること、ローザンヌ工科大学、ホテル大学（学生3・5万人）など教育機関が多数あること、スポーツ関係イベントで年間292億円が落ちていることだと思った。

行政は、市長を含む7名の執行役員で行っている。5年任期で、直接選挙で選出される。その中で市長を決める。立法の議会もあり、選挙で議員が選出され、現在は100名の議員からなるが、報酬はなく無償である。エネルギー問題、環境問題、文化振興、学術振興、観光、農業などに熱心に取り組んでいる様子。また、都市計画、プロモーションなどについても説明があった。



タニア・ブラガさん（中央）と団員（IOCにて）

### （3）ローザンヌの街並み

時間的な余裕がなく、ローザンヌの街並みを見学することがほとんどできなかったが、夕食後の時間、早朝の時間を活用して、街を歩き、日本で言う生活協同組合の店にも入った。生協の店舗が高級な店舗の位置付けになっているようで、環境や食の安全を重視している様子が理解できた。街は、戸建でも集合住宅も全体として富裕層が多い感じがする建物が多く、魅力的である。

### （4）10月26日10時〜12時30分 国際オリンピック博物館

近代のオリンピックの誕生から、苦難の歴史を経て今日に至っていることについて学んだ。1936年のベルリンオリンピックはヒトラーに政治的に利用されたこと、その4年後の東京オリンピックの開催返上など、スポーツでありながら、国際政治に翻弄されてきたことも改めて認識した。それ故に、2020年の東京オリンピック・パラリンピックは真に平和を志向するイベントにしなければならないと思う。

### ■IOCレガシー部門責任者タニア・ブラガさんから

オリンピックを単なる祭典に終わらせず、過去の歴史を踏まえて、地球環境、貧困など現代の課題を世界全体が考えるものになければならない。そのためにも、開催地はオリンピック開催後も祭典の成果を「遺産」としてしっかり残していくことの重要性について予定時間を超えて力説された。

### 結びに

正直言って、土日も含め仕事をしている自治体の長として8日間を空けることにちゅうちよしたが、大変有意義な日々であった。一つは、当初に述べたように「百聞は一見に如かず」であり、諸条件が異なるとは言



IOCレガシー部門責任者からヒアリング

え、今後の行政を進める上で大変勉強になったことである。制度をつくるとか、変えるとかだけでなく、行政を行う上でも参考にされた次第である。さらに、自治体の長や幹部職員が海外の地で「同じ釜の飯を食う」ことの効用である。率直な会話の中で刺激を感じ、今後の行政運営にとって示唆に富んだ貴重な会話が多くあった。なお、かなりのハードなスケジュールではあったが、このような貴重な経験ができたことを、市民はもとより全国市長会事務局、他関係者に感謝したい。